

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 4 月 21 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23510312

研究課題名(和文) 現代オーストラリアにおける「社会の歴史化」とナショナリズムの再編の研究

研究課題名(英文) History in Society and Regeneration of Australian Nationalism

研究代表者

藤川 隆男 (FUJIKAWA, TAKAO)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：70199305

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,200,000円、(間接経費) 1,260,000円

研究成果の概要(和文)：近年オーストラリアでは、歴史研究が停滞する一方で、歴史の社会的な意味はますます大きくなりつつある、すなわち歴史的なテーマやイメージがさまざまな文化活動に浸透している。一般的に多くの政府は、国民に対する実質的な便益を削減しながら、自国中心的な歴史を国民に提供することで、精神的な代替物を提供しようとする。オーストラリアも例外ではなく、連邦レベルで初の統一歴史カリキュラムを導入した。本研究は、その経緯をグローバリゼーションとの関係を踏まえて、明らかにすると同時に、それとは異ったかたちで社会にある一般の人びと歴史意識を、地方の歴史博物館を研究することで分析した。

研究成果の概要(英文)：All forms of history are flourishing except academic history in Australia. The History Wars may be insignificant to most history practitioners except for those historians and politicians directly involved. Thriving engagements with the past exist in many forms independent of the History Wars. Powerful economic forces in the modern world work behind the History Wars and diverse historical activities. The last two or three decades witnessed the revival of nationalism in the western world. The revitalization took many forms such as the history and culture wars, educational reforms like the introduction of national curriculum, invigorated commemorations and ceremonies, reenactments of historical events, pilgrimages to historically significant sites, sport events, movies, fiction, animation, and web-sites. I argue that such recent revival of nationalism was basically a reaction to the effects of globalization, especially economic ones.

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：オーストラリア 歴史戦争 博物館 歴史意識 歴史教育 カリキュラム 国立博物館 地方博物館

### 1. 研究開始当初の背景

国家のアイデンティティをめぐる政治的・文化的な対立、オーストラリアの「歴史戦争」は多くの研究者とマスコミを巻き込み、勝者なく終わったように見える。しかし、その背後では、「社会の歴史化」とでも呼べる状況が静かに進行し、現在も続いている。教育、文化・スポーツの領域、博物館や図書館などの施設、地域共同体の自己認識、個人のアイデンティティなどで、歴史の持つ重みが着実に増している。本研究では、オーストラリアにおける「社会の歴史化」の実像を明らかにすると同時に、グローバリズムが進行する状況下での、国民国家のナショナル・アイデンティティやナショナリズムとの関係を分析する。

### 2. 研究の目的

「社会の歴史化」の対象はきわめて広い範囲に及ぶ。歴史戦争の結末は、中等教育におけるオーストラリア史の必修化に向かった。すなわちナショナル・カリキュラムが導入されたのである。また、これとは別に、近年多くの町が「歴史の町」となり、歴史的標識が整備され、歴史的建造物が明示されるようになってきている。とりわけ注目されるのは、歴史博物館の激増である。娯楽の領域でも、スポーツを中心に歴史が積極的に利用されるようになってきている。さらに個人のレベルでも、自分の家族の歴史を研究するという意味での家族史が大流行している。これを支えているのが、大量の情報を蓄積し、それを広範に利用することを可能にしたIT技術である。

こうしたさまざまな現象の中から、近年とりわけ注目されるナショナル・カリキュラムの導入と地方の歴史博物館の隆盛を対象とし、「社会の歴史化」を構造的に理解することを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究は、文献や歴史博物館の展示などを対象とする、歴史学的・歴史社会学的な研究である。歴史に関連する社会システムとナショナル・アイデンティティの構造的連関を、国家や個人の意識なども含む形で明らかにするために、歴史の個人化や歴史の文化的浸透については、既存の研究を踏まえて分析を進めた。また、未開拓な分野である歴史教育の変化については、インタビューやカリキュラムの作成過程の分析、地域の歴史化については、地方にある多数の歴史関連施設への訪問とその分析によって研究を進めた。「歴史」と呼ばれるものや「ナショナル・アイデンティティ」と呼ばれるもの自体が、概念としても、実体としても、流動的な存在であるので、歴史社会学、カルチュラルスタディーズ、構造主義理論など、各種の理論的枠組みを援用しながら、歴史をめぐる現在のオーストラリアの社会構造の分析を行った。

### 4. 研究成果

研究成果の詳しい内容については、既発の3論文および2年前に提出し、国立民族学博物館の共同研究の成果として刊行予定の論文を参照していただきたい。ここではその概略を示すことにしたい。

まずナショナル・カリキュラムについて、検討する。ナショナル・カリキュラムの内容をめぐる歴史戦争は、レイニーの主張するバランスのとれた歴史、「喪章史観」と「万歳三唱の歴史観」のどちらにも与しない歴史というレトリックを、労働党側が受け入れることで、ほぼ終結に至った。レイニーやハースト、ハワードのレトリックを、ラッドやギラードが借用したのは単なる戦術ではなく、自由党が作ったとしてもおかしくはないような内容の歴史カリキュラムを誕生させることにつながった。その萌芽は、シティズンシップ(国民)教育を導入しようとしたキーティング時代にあり、それが開花したと言えよう。

両党が大差なく、一つの方向に進んでいる背景には、ホテリング効果というよりも、グローバリゼーションの圧力のもと、新自由主義的政策を推進しながら、弱体化する国民国家の統合力を文化政策によって強化しようとする、両党共通の思惑がある。ハワードによる多文化主義への攻撃は、結果的には、それを完全に粉砕しようとするものではなかった。その攻撃は、多文化主義を中核的アイデンティティから引きずりおろし、西洋の民主主義的価値観に基づく国民統合に従属させることになった。ハワードはこれに成功した。ラッドによる歴史戦争の幕引きはこれを反映したものである。キーティング流の多文化主義を中核とする国民統合は、当分の間、復活することはないと思われる。

しかし、他方で、多文化主義がオーストラリアから消えることもないだろう。多文化主義のレトリックは、オーストラリアの民主的アイデンティティの一部として、しかも、その起源であるヨーロッパの民主主義よりも優れたオーストラリアの特徴を強調する手段として、これからもしばらくは続いていくだろう。しかしながら、レトリックの側面を除けば、多文化主義の実態は、近年EU諸国が主張し始めた統合(インテグレーション)政策や普遍主義な人種的・民族的平等の要求とますます区別のつかないものになるだろう。

歴史戦争やナショナリズムと地方の歴史については、次のように言えよう。グローバリゼーションが本格化するのと、ナショナリズムが強まり、歴史意識の再編が起こった時期と、地方の博物館の誕生の時代は基本的に一致している。地方の歴史博物館は、これまで見てきたように、その設立に必要な資金や魅力的な展示の新設の資金を、政府の援助に頼る傾向が強く、政府が支援するような国家のアイデンティティを表現する必要に迫れると想定できる。多文化主義の影響を受けた

近年の施設には、こうした傾向が見られる。しかし、ブレイニーやハワードの喪章史観批判が、多くの博物館の展示に直接の影響を与えたようには思われない。党派的な歴史観とはあまり関係なく、地方のコミュニティは、入植 200 年記念 (1988 年) や連邦結成 100 年記念 (2001 年) を契機として、連邦・州政府の歴史振興策に積極的に応じたと思われる。

ここで歴史戦争の一部として展開された国立博物館の展示をめぐる論争について検討しておく。ハワード政権による国立博物館への露骨な政治的介入は、自由な市民文化の展開にとってきわめて有害であることは言を俟たない。しかし、他方で、さまざま見方や解釈が提示され、対話を行うフォーラムとしての博物館というポストモダン博物館の特徴は、歴史戦争を招き入れるのに好適な土壌を提供したように思われる。初代国立博物館館長のケシーは、これを歓迎するとまで述べたことがあるが、最終的には、多くの博物館で挑戦的な展示を控えるような自己規制を生み出すという結果に至った。また、新しい社会史の導入と、先住民と対等の立場で、協議に基づいて展示をするという考え方は、先住民の主体性を承認し、これまで無視されてきた価値観に光を当てることに成功した。しかし、それは同時に、歴史家や博物館員の客観的な専門性や中立性への信頼感を揺るがすことにもつながったように思われる。博物館の専門性に基づく展示が、先住民との協議に基づいて変更されるとすれば、時の政治権力が国民に関する展示に協議という介入を行おうとしたときに、博物館員が専門性に訴えて拒否することは容易ではない。現代のポストモダン博物館は、その理想からして、外部からの介入を受けやすい存在であり、今後もこうした状況が継続すると考えられる。

オーストラリアの地域の歴史意識を探る上で、歴史博物館はきわめて重要である。オーストラリアの博物館は、きわめて大まかに言うと、三層構造を成している。第 1 層は、連邦政府が運営する国立博物館。第 2 層は、これよりもはるかに歴史が古く、植民地政府 (1901 年の連邦形成以前) から引き継がれた州立博物館。第 3 層は、地方の自治体の、あるいは非公営の地方博物館である。

地域の歴史意識を探る上で必要なのは、第 3 層の博物館である。『ピゴット報告書』よれば、地方の歴史博物館の発達は「今世紀のオーストラリアにおける最も活発で予想外の文化運動の一つ」であった。オーストラリアの地方における博物館運動は、1950 年代の末に始まった。それ以前にも地方に博物館はわずかにあったが、運動と呼べるような規模になるのはこの時期以降である。

ニューサウスウェールズの地方都市、ガンダガイの博物館に例をとって、その動きを検討すると、以下のような結論が得られた。ガンダガイ歴史博物館は、地域のパイオニアを顕彰すること、幹線道路であるヒュームハイ

ウェイが町を迂回する事態に、観光を誘致することを狙って建設された。また、ダボウなどの他の地方の町への対抗意識もあった。しかし、「あらゆる住民から何かを集め、すべての住民が代表される」という、主要都市の博物館では見られない独自の目的も持っていた。こうした目的があったからこそ、歴史協会に町の人口の 20% 以上、つまりほぼすべての家族が加わり、独力で博物館を設立できたのであろう。その後、博物館は盛衰を繰り返すが、その維持ができないような困難に直面すると、新しい担い手が現れた。現在は手弁当のボランティアの力だけで週 7 日、毎日開館されている。ガンダガイの博物館の例は、決して特殊なものではなく、オーストラリアのいたるところで見られると言ってよい。

研究者と地方の博物館の関係について一言述べておく。研究者にとっての地方の博物館のイメージは、現代に属しているとは思えない、博物館学のアンチテーゼであり、ポストモダン博物館の対極にある、値札のない古道具屋のような存在である。こうしたイメージは、研究者や都市の知識人の間に広まり、そこを訪れる経験さえも規定している。しかし、こうしたイメージは現実の博物館の実態とはしばしば異なっている。実際の博物館は、ガンダガイの例で示したように、時間とともに盛衰を繰り返し、大きく変化するだけではなく、実に多様でもある。

トム・グリフィスは、先住民の歴史的関心の昂揚と、地域住民の歴史への愛着の高まりに多くの共通性を見出している。それは、「特定の場所への強いこだわり、知識の所有権と系譜への敬意、公的なものと私的なもの、話すことと書くこと、記憶と想像の絶え間ない交差」などである。研究者は、地方の博物館運動を担う住民も、先住民と同じく、一つの主体であり、一つの声だということをも認める必要がある。

最後に、学術的な歴史と社会のなかの歴史の関係について、簡単に触れておく。学術的な歴史が専門性を追求するなかで、蛸壺化して、社会的な存在意義を失っていくなかで、社会における歴史の意味はますます大きくなりつつある。一般の人びとと歴史の関係は大きく変わりつつあり、その原因としては次のようなことが考えられる。新しい技術やメディアの登場によって、歴史化の手を借りなくても容易に歴史にアクセスすることが可能になった。歴史が、文化的・社会的・経済的なテーマやジャンルとしてきわめて重要になった。テレビ、博物館、小説、映画、ゲームなどで利用される歴史的完成やイメージは、多様で、複雑で、不安定であり、歴史は、国民、商品、知識などと関連して、想起されるだけでなく、個人の記憶や経験としても利用される。こうした動きに歴史学は基本的に無関心であり、そうした歴史的知識に圧倒されつつある。それをかろうじて支えているのが国民国家の歴史的正当性を支えると

いう役割である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

- 藤川隆男、"House of History: Academic History and History in Society" 『パブリック・ヒストリー』査読有、11号、2014、106-116
- 藤川隆男、「オーストラリアにおける歴史博物館の発達とポストモダンティ」『西洋史学』査読有、249号、2013、1-19
- 藤川隆男、「オーストラリアにおける歴史戦争後の歴史博物館」『パブリック・ヒストリー』査読有、10号、2013、15-33

〔学会発表〕(計 1 件)

藤川隆男、「オーストラリアのアジアへの接近と白豪主義の終焉」、大阪大学西洋史学会、2011年5月28日、ワークショップ西洋史・大阪

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/bun45dict/index.html>

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

藤川 隆男 (FUJIKAWA TAKAO)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：70199305